

むかし、あるところに、ふたりの兄弟がいました。兄さんも兄さんの嫁さんも、とても意地悪でけちんぼうでした。それで、弟は母親を連れて家を出て、ふたりだけでまずしく暮らしていました。

ある晩、弟は、とうとう食べる物がなくなったので、兄さんの家に行きました。そして、

「兄さん、どうか、お米を一升かしてくれ。あした、山で花を取ってきて、売ったお金でお米を返すから」とたのみました。兄さんは、

「おまえなんかに貸してやる米はない」といって、弟を追い返しました。

あくる日、弟は、遠い山へ出かけて行って、たくさんの花を取ってきました。そして、町で売り歩きました。けれども、どこの家でも、

「花は、ちようど買ったばかりだから、よそへ行ってくれ」といって、買ってくれません。

弟は、がっかりして、どンドン歩いて行きました。すると、海辺に出ました。波が、さーさ、さーさとよせているのを見ているうちに、弟は、

（どうせ買ってくれる者がいないんだから、竜宮の神さまにでもさしあげよう）と思って、花を残らず海に投げこみました。すると、花を投げこんだ所から、ぽつと、男の人が出てきて、

「これは、どうも、ありがとうございます。竜宮では、今、正月の花をさがしているところでした。こんなに美しい花をたくさんいただいて、ぜひともお礼がしたいから、わたしといっしょに来てください」といいました。弟がおどろいていると、男の人は、

「わたしのふむ所をふんで行けば、ひと息で行けます」といいました。弟は、こわごわ、男の人のふんだ後をふんで行きました。すると、たちまち、竜宮の門に着きました。

門には、七人の番人がいました。白い魚は白い鳥になって飛び、赤い魚は赤い鳥になって飛び、なんともいえない美しさでした。

男の人は、弟に、

「神さまは、あなたに、何がほしいかと聞かれるでしょう。そのときは、犬がほしいといってください。この犬は、竜宮でも特にたいせつな宝犬なのです」と教えてくれました。

神さまは、弟に、花のお礼をいって、おいしいものをたくさんごちそうしてくれました。三日たって、弟が帰るとき、神さまは、

「みやげにおまえのいちばん好きな物をあげよう。おまえは何が好きか」とたずねました。弟は、教えられた通り、

「わたしは、犬がいちばん好きです」と答えました。神さまは、いっぴきの犬をくれて、いいま

した。

「この犬は、だいにじにして、毎日四つ組のおぜんでご飯を食べさせなさい。そうすれば、きっとおまえは大金持ちになるだろう」

弟は、犬を連れて、童宮からもどってきました。たった三日と思っていたのに、三年もたっていました。母親は、

「こんな貧乏暮らしなのに、犬なんか連れてきて、どうするつもりだ」と、弟をしかりました。

弟は、「ちよつと待っていてください」といって、あるだけの食べ物を集めて、まるで旦那さまにするように、四つ組みのおぜんで、犬に食べさせました。犬は、食べおわたかと思うと、山へ飛んで行って、大きないのししをくわえてもどってきました。

犬は、毎日毎日、たくさんのいのししを取ってきました。弟は、それを売って、ちよつとの間に大金持ちになりました。

兄さんは、ふしぎな犬の話聞いて、弟の家にやってきました。

「おまえの犬は、毎日、いのししをくわえて持ってくるそうだが、その犬、わしに貸してくれ」
弟は、

「いやいや、いくら兄さんでも、あの犬は宝犬だから貸すことはできない」といってことわりました。それでも、なんでも、兄さんは、犬を連れて行ってしまいました。

兄さんは、いのししをたくさんつかまさせようと思って、犬にうんとごちそうを食べさせました。ところが、犬は、ごちそうを食べてしまうと、いきなり飛びかかって来て、兄さんのおでこにかみつきました。兄さんは、

「これはいかん。食べさせかたが悪いにちがいない」と思って、弟にたずねに行きました。そして、教わったとおりに、こんどは、四つ組のおぜんをそろえて、ご飯を食べさせました。犬は、食べおわたかと思うと、いきなり飛びかかって来て、兄さんのひざにかみつきました。

兄さんは、「もうがまんできない」といって、犬を打ち殺してしまいました。

兄さんが犬を返しに来ないので、弟は兄さんの家に行って、

「犬を返しておくれよ」といいました。兄さんは、

「おまえの犬のせいで、おれは、おでこをかまれ、ひざをかまれ、ひどい目にあつた。だから殺した」といいました。弟は、泣きながら、死んだ犬を連れて帰り、表の庭の手水鉢ちよすずばちのそばにうめました。

つぎの朝、犬をうめた所から、竹が一本生えていました。竹は、見る間に天までとどいて、天の米ぐらをつきやぶってしまいました。竹が、一節ふしのびると千石の米俵こめたわいがふってきました。二節のびると、二千石、三節のびると三千石と、米俵がどんどんふり積もって、屋根より高くなりま

した。

その話を聞いて、兄さんがやって来ました。そして、

「どれどれ、おまえの犬の死がいを、ちよつと貸してくれ」といって、連れて帰り、自分の家の手水鉢のそばにうめました。

つぎの朝、犬をうめた所から、竹が生えていました。竹は天までとどきました。そして、天のくそぶくろをつきやぶり、くそがおそろしいほどたくさん流れ落ちてきました。兄さんも兄さんの家も、くそにおしつぶされてしまいましたとき。

これだけ

村上郁再話

資料『旅と伝説』三元社